



インド日記

牛とコンピュータの国から
小熊英二著

- 四六判 402ページ
- 定価 2,700円(税別)
- 新曜社

アジアから日本を見る

インドは現在の日本しか知らない人間にとっては驚きの多い社会である。

街頭に立つだけで明らかに分かる貧富の格差。牛の集団がハイウェイの中央分離帯で昼寝をしている風景。たびたびの予定変更や値引き交渉に表れる価値観のずれ。「召使」や「知識人」といった現代日本では死語となった社会階層が厳然として実在している状況――。

本書は、2000年1月から2月にかけて、インドのデリー大学で日本近代史を講じた著者が、インド滞在中の経験や観察、あるいは現地の人々と話したことを見たためたものである。

おりしもインドは高度経済成長とグローバリゼーションに揺れ、急速な社会の変化や価値観の動搖、そして右派ナショナリズムの台頭に直面していた。

インドは「コンピュータ・カフェの門前に牛が立ち、お寺が最新式の音響システムを使っている」といったかたちで、古いものと新しいもの、伝統と近代が入り混じった状態にあった。

この日記の根底にあるのは、「社会の変動と近代化の中で、人間がどのように自己の位置とアイデンティティを定めていくのか、また、そうした人間の作る社会のあり方はどのようなものか、その場合、国家と人間はどのような関係を築いていくのか」という近代日本史を専門とする著者の関心である。

ただ、ここで描かれたインドは、「日本とまったくかけ離れた社会」ではない。著者は、「相手を理解不能な異文化として描くことは、しばしば思考の停止を招き、ひいては自集団のアイデンティティを確保する手段として他者を利用することに

つながりやすい」と自制する。――現在のインドが「牛とコンピュータの同居」に象徴される社会だったとしても、日本もまた、「ゲイシャとサムライが半導体を作っている国」とみられているのである。

本書は日記である以上、統一されたテーマというものはない。ただ、日々の体験から書くという日記の脈絡のなさから、結果的に地域の自立性や伝統文化、宗教のあり方、文化の相互影響や革新、テクノロジーと社会変動、社会階層と政治意識――など、より多角的にインドにアプローチしている。

街、人、牛、美術、フェミニズム、NGO、国境、ナショナリズム、宗教、サバルタン・スタディーズ、テクノロジー、グローバリゼーション、近代化、コンピュータ、アイデンティティ、学校、スラム……。

これらのキーワードを通じて著者が見たのは、インドそのものよりもインドを通じて見えてきた何かだった。そして、その過程で問われたのは、著者自身の想像力と世界に対する姿勢だったのだ。■